

## 『 神の義を求めなさい 』

ローマ人への手紙 3章 21～26節

青木 信太郎 牧師

### ◆ 新しい時代

ローマ書の主題テーマは1章16, 17節です。【～福音は、ユダヤ人をはじめギリシヤ人にも、信じるすべての人にとって、救いを得させる神の力です。なぜなら、福音のうちには神の義が啓示されていて、その義は信仰に始まり信仰に進ませるからです。～】つまり「福音は信じる者に救いを与えるのです。なぜなら福音は神の義そのものであって、それはただただ信仰によるのである」とパウロは最初に明言したのです。その直後1章18節からこれまで、パウロは延々と異邦人の罪、とりわけ同胞ユダヤ人の過ちと偽善、ユダヤ人もまた罪人であることを長い分量を割いてパウロは指摘してきました。そして、律法や割礼によって義と認められることもないことをパウロは説明したのです。ですから義なる神様の前にすべての人の口はふさがれて、全世界が義なる神様のさばきの前に為す術はなし、神のさばきは免れないのであり、罪人の道は行き止まりであることが確認されたのです。そして今朝のテキストへと導かれてゆくのです。ローマ書の最初に主題テーマとして提示された「神の義」について、そして「ただ信仰による」という事柄について今朝のテキストでパウロは明らかにしています。パウロは21節【しかし、今は】と語り始めています。これまでパウロは、全世界が罪人であるという罪の悲惨を説明してきたのであり、決して「昔の、かつての」話しをしていただけではありません。にもかかわらず、【しかし、今は】と語り始めるのです。すなわち「今までとは違う新たな時代が始まっています」とパウロはここで語り始めたのです。「律法によっては救いがないことが明らかにされた今、福音の時代が始まっています」「罪とその悲惨について確認してきましたが、罪人の道は行き止まりではありません。律法ではなく福音によって救いが明らかにされています」という意味においてパウロは【しかし、今は】と語り始めているのです。

### ◆ 明らかにされた神の義

新改訳聖書2017版で21節は次のように訳されています。【しかし今や、律法とは関わりなく、律法と預言者たちの書によって証しされて神の義が示されました。】律法ではなく福音という新たな時代に入っていると説明するパウロは、モーセの律法や預言者たちの書すなわち旧約聖書においてずっと証し(預言)されていた神の義が、今、はっきりと示されていると言うのです。明らかにされた神の義とは【22節 すなわち、イエス・キリストを信じることによって、信じるすべての人に与えられる神の義です。そこに差別はありません。】パウロは二つの重要なことを説明しています。一つは「神の義とは、イエスをキリスト(救い主)と信じる信仰によって与えられるものである」ということ。もう一つは「その神の義はユダヤ人もギリシヤ人(異邦人)も何の差別もなく信じる者に与えられるものである」ということです。

何の差別もなく信仰によって与えられる神の義についてパウロは更に詳しく解説します。【23-24節】パウロはこれまで長きに渡って説明してきた罪の問題を改めて一言に集約しました。「異邦人もユダヤ人もなく、すべての人は神の前に罪を犯しました」それゆえ「神からの栄誉を受けることができない」。別訳では「神の栄光を受けることができず」「神の栄光に達しない」。かつて若き日のダビデは夜の野原で羊の番をしているとき豎琴を奏でながら歌いました。【あなたの指のわざである天を見、あなたが整えられた月や星を見ますのに、人とは、何者なのでしょう。あなたがこれに心に留められるとは。人の子とは、何者なのでしょう。あなたがこれを顧みられるとは。あなたは、人を、神よりいくらか劣るものとし、これに栄光と誉れの冠をかぶらせました。あなたの御手の多くのわざを人に治めさせ、万物

を彼の足の下に置かれました。すべて、羊も牛も、また、野の獣も、空の鳥、海の魚、海路を通うものも。】本来、人間は天地創造において神のかたちとして創造されました。神の栄光、誉れが分け与えられていたのです。にも関わらず人はその罪によって神との間に断絶が生じ、神の栄光に自ら近づくことが出来ない存在となったのです。その心と口は神を褒め称えるのではなく、神と隣人を呪うようになったのです。罪による墮落です。異邦人もユダヤ人も区別なくアダムに連なるすべての人が罪の下にいるのです。律法や割礼によっては神の栄光を受けることができない。この問題の解決を人は持ち合わせていないけれども、罪の解決は神によって与えられているとパウロは説明するのです。24節【キリスト・イエスの贖いのゆえに】とは「キリスト・イエスの贖いを通して」という意味です。“贖い”と訳される言葉は本来、奴隷をその束縛から自由にするため買い取るための身代金を意味する言葉です。かつてイスラエルの民がエジプトで奴隷であった状態から救い出されるとき、一歳の雄の小羊をほふり、その血を取って、家々の二本の門柱とかもいに塗りました。神はそのしるしを見て、滅びのわざわいを過ぎ越されたのです。贖いのための代価は小羊とその血でありました。この贖いは人によるものではなく神様から与えられたものです。パウロはここでハッキリと説明するのです。【25節】すなわち、あのナザレのイエスこそ、すべての罪人の罪の赦しのための贖いの代価であったのだと。罪の贖いのための犠牲、なだめの供え物は小羊イエス・キリストであると。ナザレのイエスが十字架上で流された血潮によって、罪人である私たちの滅びのわざわいは過ぎ越されるのであると。

そしてパウロは続けて説明します。【25-26節】人を滅びから救うために、罪人を義と認めるために御子イエス様を私たちの贖いの代価としてくださったことこそ神の義であると。今から二千年前にエルサレムの外れのゴルゴタの丘の十字架上でイエス様が血潮を流されたのは、すべての罪人の贖いの代価であった。この福音こそ神の義であるとパウロは語るのです。旧約聖書の時代に生きたすべての人々の罪を神様は忍耐をもって見逃してこられました。それは【今の時に】すなわち今から二千年前のあの時に、御子イエス様の十字架による贖いを通して神の義を現そうと神ご自身が時をもってご計画されていたからです。イエス様以前の人々もイエス様の十字架においてのみ義と認められるのです。そして十字架から二千年を経た今現在に至るまで、神は私たちの罪を忍耐をもって見逃してくださっているのです。イエス様の十字架という贖いの代価を罪人が受け取るのを神は待っておられるのです。イエスを救い主と信じる者をその信仰によって義と認めるために、神様は待っておられるのです。

#### ◆ 信仰によって

イエス・キリストの十字架という贖いの業に現された神の義は、罪人を義と認めて滅びから救う神の愛なのです。これが福音です。福音と訳される元の言葉は「良い知らせ」という意味です。すべての罪人の罪を赦し、救うために、私たちを贖うための代価としてイエス様は十字架で血潮を流されました。私たち罪人には何の資格もなければ、このように神に愛される理由も見当たりません。パウロは24節において【価なしに義と認められるのです】と教えています。神様が私たちを愛する愛は無償の愛なのです。ですからパウロは【ただ、神の恵みにより】と語りました。そうです。イエス様の十字架による贖いという福音、良い知らせは、神様からのただただ一方的な恵みとして私たちに差し出されているのです。私たちはこの神様からの恵みを受け取るだけなのです。何の代価も自ら支払う必要もなければ、何の努力も要らないのです。私たち罪人は律法を守り行うことができない弱くて愚かな存在です。私の罪を赦して救うためにイエス様は十字架で血潮を流していのちを捧げてくださったという神の恵みの前に、自らの罪を悔い改めて感謝しますと受け取るしか出来ないのです。これが信仰です。律法や割礼ではなく、イエス・キリストを信じる信仰によってのみ神の前に義と認められるという福音こそが神の義なのです。イエス様のご降誕を待ち臨むこの時に、あなたのいのちを救うためであったイエス・キリストの十字架、神の愛、神の義を先ず第一に求めてはいかがでしょうか。神は忍耐をもって私たちを待ってくださいました。